会報 きらきら
しなの星空散歩会
第 60 号　2017 年 4月

会員 塚 田 武 男 さんの追悼特集号

目　　次

塚田武男さん追悼特集

アナログとデジタル	髙野　勝人	３
塚田武男さんとの想い出	丸山　晴男	５
塚田さんの思い出	是枝　敦子	７
塚田武男さんとの想い出	宮下　正樹	１０
塚田さんの想い出	岩田　重一	１２

塚田武男さん記念記事

タイの黒い太陽	塚田　武男	１３
太陽と水と果物と	塚田　千春	１６
金環日食観望記	塚田　武男	１８
オーロラを追ってフィンランドへ	塚田　武男	２０
こんなこともある 不運な新疆ウイグル自治区の皆既日食	塚田　武男	２３

２００１年　３月３１日　総会記念撮影

アナログとデジタル

髙野　勝人

前回の宮嵜勉さんに続き、今回は塚田武男さんと二回続けての追悼特集となってしまいました。ほんとうに残念なことです。

私の記憶では、塚田さんは、私が入会したときには、すでに、きらきらに居られたと思います。ですから、きらきら発足当時あるいは、発足まもなく入会されたんではないでしょうか？　私が入会した頃、総会は泊まりの自炊でやっておりました。会場は、鬼無里ふるさとの館でした。

懐かしいですね！塚田さんは、総会の議長を任されるのが恒例になっていて何年か連続でやられていたのをおぼえています。その議長ぶりが、仕事柄慣れておられるのか非常に効率よく、てきぱきとこなされている姿に感心したのはもちろんなんですが､それに加えてその所々にご自分の意見を織り交ぜながら進行していく、いわゆる‘塚田節‘は毎回楽しみにしていました。

そんなオリジナリティあふれる塚田さんと語り合ってみたいことがありました。それが今回のテーマである「アナログとデジタル」。

私の場合、1 眼レフはいまだにアナログつまりフィルムカメラである。（最近 20 年ぶりに再開しました）その理由は後ほどとして、塚田さんも会報に載せられている写真や文章からすると、デジタルを導入した時期は 2008 年ごろと遅いほうなので、それまでは私と同じアナログ派だったのでは？　いや、実は今でもアナログ派なのでは？　などと勝手に推測しています。

また、塚田さんはアマチュア無線をやられていたので、その関連でオーディオにも興味があったのではないか？　そうするとアナログ派（レコード、テープ）、デジタル派（CD、MD）のどっちだったのだろう？とか、そんな話をしてみたかったのです。

世はまさにデジタル時代。この時代のながれは、アナログ派だろうが何だろうがデジタルへの切り替えを強制的に要求してきているようです。しかし､アナログが見直されている分野もあります。たとえば時計や車のメーターはほとんどがアナログですね。人間にとってアナログのほうが見やすいということでしょう。

カメラはどうでしょう？‥‥‥この間、フィルムを買おうと電気店を２軒はしごしましたが売ってませんでした。そしてキタムラカメラに行くと、店の片隅にひっそりと置いてありました。‥‥‥それもそのはず！今時､フィルムを買いにくる奴なんぞ相当の時代遅れか､変人です｡なぜなら、デジタルの解像度は今や飛躍的に向上し、フィルムなど足元にも及ばない状況なのです。加えてフィルムは、それを買うのにお金がかかり、それを現像するのにお金がかかり、プリントにもお金がかかるという三重苦に対し、デジタルは、プリントにはお金がかかるが、プリントしなくも、あらゆる媒体に保存ができ、その都度モニターで観れるわけです。フィルムが勝っているとすれば、フィルムにしか出せない‘味，ぐらいなものでしょうか？

自称、コスパ至上主義の私が、なぜここまでフィルムカメラにこだわるか？‥‥‥それはアナログ派ということもありますが、‥‥‥今使っているオリンパスをお役ご免にさせたくないわけです。

お役ご免にすることは私にとって、とても悲しいこと、そして可哀想です。なんか湿っぽくなってきましたが、塚田さんだったらこの気持ちわかってくれるんじゃないかなと、かってに期待しているしだいです。

私も、いずれは塚田さんと同じ所に行くわけですから、その節はぜひこの「アナログとデジタル」語り合いましょう。一杯やりながら（あの世だったら飲めるかな？）

***** ***** ***** *****

１９９４年　３月１３日　総会のひとコマ

２００１年　８月１２日　宴会中のひとコマ

塚田武男さんとの想い出

丸山　晴男

私が、塚田さんと初めてお会いしたのが約 44 年前です。私の店にお客さんとしてこられたのが最初だったと思います。塚田さんは長野市役所のフォトクラブに所属していて、フォトコンテストに精力的に応募して多くの作品が入賞していました。中でも記憶に残っているのが、奥様と一緒に旅行されたスイスでのアルプスの壮大な写真が長野写真県展で特選というすばらしい賞を受賞されたことです。

塚田さんは登山が大好きで、私もいろいろな山に連れて行ってもらいました。特に思い出に残るのが、厳冬の北八ヶ岳、同じく横手山、等々素晴らしい体験を経験させてもらいました。

わたくしが、星空に興味が持ったのは、塚田さんのお誘いでした。ある日、来店した塚田さんが突然、ハレー協会に入らなかと・・！！お聞きすると、オーストラリアにハレーすい星を見に行くとのお誘いでした。今まで天体のことなど、星の“ほ”も解らない私でしたので、軽い気持ちでオーストラリア旅行のつもりで快諾しました。観測場所は、バサーストというオーストラリアの内陸部で真っ暗なロケーションでした。その時の満天の星の輝きをみた時の感動が忘れることができませんでした。それ以来、星空に興味を持つきっかけになったのも、塚田さんのおかげでした。

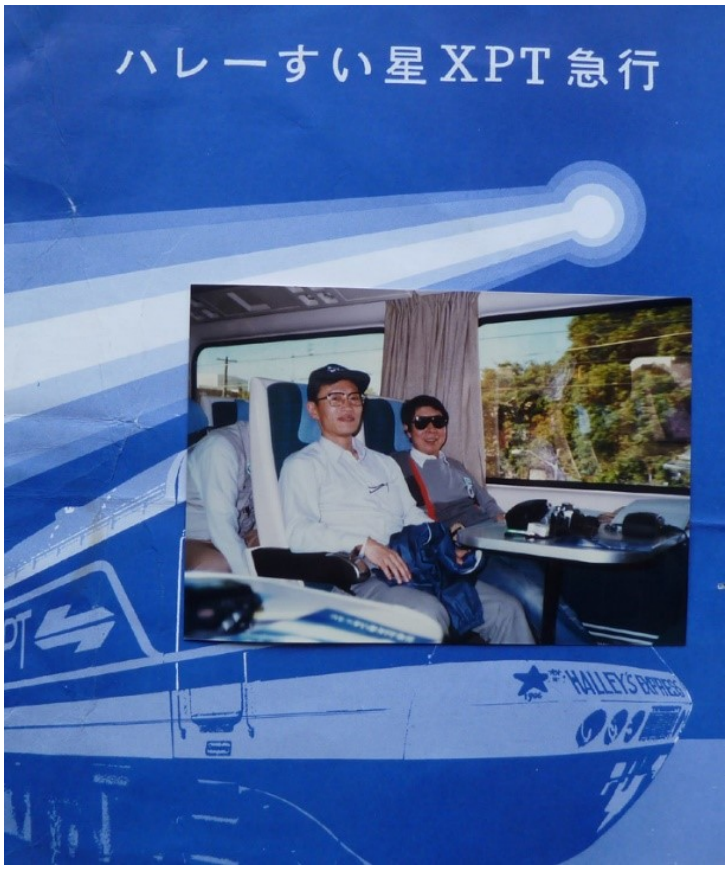
その他では、アマチュア無線では一級のライセンスを持っておられ、海外の無線家とアクティビティーに活躍していました。塚田さんがアマチュア無線に興味を持ったのは、塚田さんと戸隠に撮影に行った折、私がポータブル無線機を持っていき、他局と交信の様子に関心を示しようでした。その後、アマチュア無線のライセンスを収得して、後に最も難しい一級ライセンスに合格して国内外の多くの無線家と交信し、アワードハンターとして活躍していました。

他にも、いろいろお世話になりました。心よりお礼申し上げます。

“塚田武男さん、ありがとうございました”

志賀高原
横手山スカイレーター
横手山山頂
標高2305m
(雲の上の世界)

思い出の写真


ハレーすい星XPT急行
HALLEY'S EXPRESS

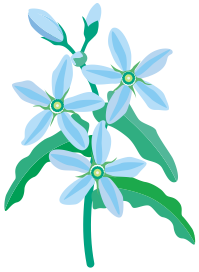
追悼　塚田武男さん

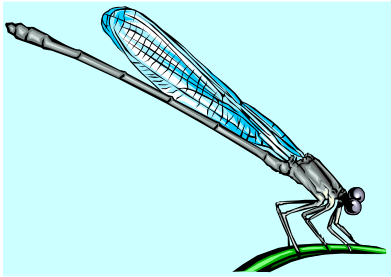
塚田さんの思い出

是枝　敦子

塚田さんが亡くなったとお知らせをもらったとき、私は岩手県の山奥の宿にいました。ゴールデンウィークになっても春まだ遅い東北の山では、芽吹きも遅くまだ早春の趣きで、冷たい風に水仙の花が揺れていました。その悲しいお知らせとともに、そのりんと咲く水仙の花の景色が強烈に心に焼き付いています。

きらきらに初めて入ったころ、塚田さんの印象は少し気難しい、怖そうな方という感じでした。きらきらの総会などでも寡黙な印象で厳しい方なのかと思っていました。ところが、だんだんお話をしていくと、それはまったく間違いだったことに気がつきました。塚田さんほどやさしく、こまやかで、まじめな方はなかなかいないと気が付きました。そして充実した自分の世界を広く深くお持ちの方だということがわかってきました。まさに私があこがれる世界をすでにお持ちでした。私の好きなものとの共通も多く、その世界ではエキスパートなのに決して偉そうにすることなく、おだやかに多くを教えていただきました。塚田さんには「物事は、真剣に取り組めば取り組むほど充実してくる。」と教えていただいたような気がします。私が知っているだけでも、天文・写真・アマチュア無線・鉄道・昆虫などなど、まじめに真剣に熱中することが充実した喜びを育むということを教えていただきました。





塚田さんとの思い出は、たくさんありますが一番印象が変わったのは、1995 年のタイへの日食ツアーでご一緒したことです。塚田さんは仲良くご夫婦で参加されておられました。20 人ほどのツアーで寺院などの旧蹟を巡っているとき、なぜかちょこちょこ走っている塚田さんがいて不思議に思っていました。植え込みに飛びこんで何しているのかと見たら、なんと小さな捕虫網のようなもので小さな虫を捕まえようとしていました。その姿はいつもの冷静沈着な塚田さんではなく、少年のようでした。そこには無心な「虫や」さんがいました。そばでは、奥様が苦笑いをされていました。日食のツアーが成功裡に終わり、しばらくしてツアーの写真交換会兼打ち上げ会が居酒屋でありました。そのとき、なんと塚田さんはツアーで捕獲した虫たちを標本にして美しい箱に仕上げたものを持ってきて、みんなに見せてくれました。無神経な居酒屋のおばさんは、「ま

ー、生きてる虫がかわいそうだ」と大きな声で言い放ちました。それはある意味一般的な意見かもしれません。でも塚田さんは表情ひとつ変えずにニコニコしているだけで、とても紳士的でした。豊かな世界をしっかり持っていると小さなことには動じない強さが育まれると知った瞬間でもありました。

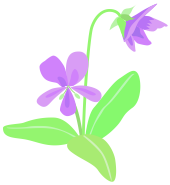
そして何よりその箱状のものを手にして、標本の美しさに私は息を呑みました。ひとつひとつの虫に向けられた膨大な手間と時間と塚田さんの思いに息が詰まりそうでした。時間が止められたように美しく虫が並んでいました。私なら気にも留めないような、小さなコガネムシみたいな虫・ハエ・ガ・ちょうちょなど旅で出会ったさまざまな虫たちが並んでいました。美しく羽を広げられ、小さな虫の命への愛情がクリップされていました。旅行の後のわずかな期間でこの美しい標本を仕上げたことに私は単純に感動しました。「虫や」さんの真髄を見た気がしました。旅の思い出をこんな風に残すこともできるのかと初めて知りました。夢中になると食事も忘れて部屋にこもってしまうと奥様が笑っておられましたが、少年のような塚田さんをほほえましく見守る穏やかな奥様の視線にも感動したのを覚えています。

私は博物館に 15 年間勤めていましたが、きらきらとしてもお客さんとしても博物館へ多く足を運んでくださいました。光害調査も誰よりもまじめに取り組んでいただいていました。調査地点がいつもと変わっていると指摘を受けたこともありました。調査地点への愛着がおありのようでした。調査後は、きれいな天体写真といっしょにデータをいつも早々に持ってきてくれました。また、一番多くプラネタリウムへ来てくれたお客さんだったかもしれません。お世辞にも「孫が是枝さんのファンだから」と言ってくださり、本当に多く投影を見にきていただきました。拙い私の投影に、コンスタントに通っていただき、励みになっていたのはいうまでもありません。私が博物館を辞めるときも、暖かいねぎらいのお言葉とお菓子を持ってきてくれました。とても身に沁み、うれしかったのを覚えています。

総会やペルセでペンションに泊まると、決まっていつも早起きで静かに外を眺めていた塚田さん。博識でアマチュア無線や鉄道にも詳しい方でした。私が小さな地方の鉄道路線の話をすると塚田さんは絶対ご存知で、ニコニコ笑いながら乗ったことがあるとお話されていました。もっともっと鉄道のことや無線やさまざまなことのお話を伺いたかったなと思っています。とても残念です。

「自分の好きなものを大事にする」そんな素敵なことを塚田さんに教えてもらったような気がします。塚田さん、本当にいろいろありがとうございました。塚田さんの足元にも及びませんが、そんな豊かな人生が送れるように塚田さんのこと忘れずに生きていきたいと思います。心よりご冥福をお祈りいたします。いつかまたお会いできるときまで、さようなら。ありがとうございました。合掌。

1995．10.21.タイ皆既日食ツアーにて（左から５人目が塚田さん）



＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊

２０００年　４月　１日　きらきら総会にて

塚田武男さんとの想い出

宮下　正樹

私が初めて塚田さんとお会いしたのは、平成 8（1996）年 12 月に開催された恒例の忘年会であろうか、それとも翌年 3 月の総会であろうか。記憶は定かではないが、いずれにしても私がきらきらに入会して間もない頃である。以来、信州新町のきらきら観測所の草刈りやペルセウス座流星群観測会などにもご一緒させていただいた。ほどなく、塚田さんは生粋の日本酒党だということを理解した。

そんな長い付き合いであるが、一番印象に残っているのは、意外にも最近のことである。平成 27 年 9 月 21 日のできごとである。私は前日の土曜日から職場のテニス部の合宿に参加しており、飯綱高原で宿泊していた。二日目の日曜日もテニスの練習があるのだが、私は朝早く起きてカメラを持って鏡池などを撮影しようと思い、車で出掛けた。高原の数カ所を撮影し、そろそろ宿泊していた場所に戻ろうと山道というわけでもないが、けっこうな細い道を車で走っていたところ、道沿いに咲くピンク色の秋名菊が目に留まった。車を停め、カメラを持ち、パシャパシャと数枚撮影した。

そして再び車に乗ろうとしたところ、前からリュックを背負った男性が細い道を僕のほうへ歩いてきた。よくもまあ、こんな誰もいないような道を一人で歩いているものだと不思議に感じたが、近づいてくると、首からカメラをぶら下げている。ん？かく言う私もカメラをぶら下げている。同じようなことを趣味にしている人なんだな、と瞬間思った。

さらに近づいてくると、ぶら下げているカメラはキャノンの EOS だ。私もキャノンの EOS なので、おもしろいこともあるのだなと思った。そしてすれ違いざま、目深にかぶった帽子の下から、ちらっと顔が見えた。その瞬間、すべてがつながった。

「塚田さんだ。」

塚田さんは飯綱に別荘を所有していることは前から知っていた。その近くだ。そしてカメラは EOS だ。背格好も塚田さんだ。

「いやー塚田さん！」と声をかけた。その次の瞬間、二人は同時に「何でこんな所にいるんだい？」。

塚田さんは当時、闘病中だったが、医者から「なるべく外に出てウオーキングなどの運動をしたほうが良いと言われたので、真面目に取り組んでいるんだよ」とおっしゃっていた。5 分ほど立ち話をしたが、とても元気そうだった。「今度また一杯やりますか？」とお誘いしたところ、「おー、やろうじゃねーか」と元気な声が返ってきた。

その後、丸山さんを交えて本当に長野駅前で 3 人で飲み会をやった。寒い日だったこともあったのか、いつものように日本酒の熱燗を美味しそうに飲んでおられた。そのちょっと前に、塚田さんはご夫婦で中仙道を全部歩くことに挑戦していたことがあり（おそらく達成されたのだと思う）、そのとき木曽のあたりで撮影した写真が保存されている SD カードが読み取れなくなってしまい、丸山カメラさん経由で私に何とかならないか、という依

頼があった。私は持っているパソコンソフトでほとんどの写真を復旧させることができ、SD カードをお返ししたわけだが、そのことをものすごくありがたかった、とおっしゃっていた。そして、帰り際、今日は楽しかったし会えてよかったから毎月１回ぐらいは飲み会をやろうか、と言いながら、満足そうに帰られた。まるで、昨日のことのようである。残念ながら、その後、飲み会は行われなかった。

もうひとつ、塚田さんとは関わりがある。実は、私の父親とずいぶん前から親交があるのだ。私の父親も長野市の職員だったからだ。少し前になるが、きらきらの写真を父親に見せていたところ、「この方、塚田さんじゃないの？」と父親がいう。「何で知ってるの？」と聞くと、仕事でずっと前から知っているとのこと。おまけに、少し前の正月に父親がたくさん来た年賀状を１枚１枚見ていたとき、「あっ」と気が付いた。塚田さんからの年賀状だ。ずいぶん前から年賀状の交換をしていたようだ。

ものすごい「縁」のある方であった。機械好きで人情があり理知的で優しい塚田さん。なかなかすべての思い出を語ることは困難・・・というのが正直なところです。塚田さん、本当にありがとうございました。

***** ***** ***** *****

２００１年　８月１２日　集合完璧！！

塚田さんの想い出

岩田　重一

私が８年前にきらきらへ入会しその年の夏の 2009 年皆既日食の説明会&ペルセ観望会か年末の忘年会で初めて塚田さんとお会いした様な記憶があります。その後もお会いするのはいつもお酒の席だけでしたが、ほっこりする口調で海外での日食やオーロラの話を聞かせていただきました。

残念ながら 2009 年の上海皆既日食には定員オーバーで申込却下されてきらきらの皆さんとは別行動となってしまい、私は天候にも恵まれず本当に観光旅行のみとなったしまいました。塚田さんから伺っていた日食観察が出来ず次回以降に使わせていただこうと思っています。

一方オーロラについては非常に参考となり心に温めて機会を探っているところに、ちょうど大蔵館長のオーロラのお話もあり背中を押されて、ついに 2015 年 10 月 1 日にカナダのイエローストーンで念願の初オーロラ観望体験ができました。

旅の注意点をたくさん伺っていたのですが、いざオーロラが天空に出てくると想定通りに手は動かず、必死に目で脳裏に焼き付けることが精一杯で終わってしまいました。

塚田さん、旅の話をたくさん伺えて、本当にありがとうございました　またお会いして旅の話をしましょう！

イエローナイフでのオーロラ　写真右

*****　*****　*****

写真左　２００１年　３月３１日　総会風景

塚田武男さんの記念記事
会報１２号より(1995 年 12 月)

タ イ の 黒 い 太 陽

塚田　武男

１　宇宙から音は響いてくる・・・・・・？

1995 年 10 月 24 日 10 時 47 分、太陽の最後のかけらがスッときえて、暗い空に伸び広がるコロナ。その時、周囲の音が全部消えて全くの静寂の中にいるように、私は感じた。音の無い音を聞いているように感じた。

コロナの中の黒い太陽、少し離れて大きく金色に輝く金星、先ほどまでの厚さはおさまって爽やかな涼しさを感じる。はるか地平は夕焼け色の幡幕を低く張り渡したように見える。飛び回っていた鳥は樹上に群れ止っている。草むらを舞っていた蝶やトンボも草葉にじっととまっている。息をのんで、シャッターを押すことも忘れてただ茫然として、時刻の長さもわからなかった１分４０秒の皆既。チカッと光が現れたと思う一瞬のダイヤモンドリング、後はみるみる輝きが増して正視できないまぶしさが戻ってきた。

その時、広大な虚空で、太陽と月と地球は轟音を立ててすれ違った、確かに耳を聾するばかりのその轟音を聞いた、と私は思った。

宇宙の天文現象は本当は大音響を発しているのだ、と思うのは異常感覚だろうか？

２　色を表現するボキャブラリーの乏しさを嘆く・・・・・！

コロナの美しい色を表現する言葉を思いつかないことが悔しい。ひとことで真珠色と言われてはいたが、改めて色を表現する言葉の乏しさをつくずくと思い知らされた。真昼の金星は思いもかけぬ高さにあって、そういえば、宵の明星も明けの明星も見上げる高さに輝いているのを見たことはなかったことに気がついた。この輝きもただ金色とひとことで言ってしまうのはもったいない。

３　どうして月と太陽は同じ大きさなのか・・・・？

不思議だ、なんという偶然か、と、ほとほと感嘆してしまう。月と太陽はあれだけ実の大きさが違うのに、その位置・地球からの距離がほどよいところにあって、見かけの大きさがほぼ同じであることに。大蔵さんによると、月は少しずつ地球から離れつつあって、遠い将来、地球上では皆既日食は見られなくなってしまうという。(その頃、はたして人類は存続しているであろうか。)

４　洪水つて濁流が押し寄せてくるのでは・・・？

今年タイは何年ぶりかの大洪水で、バンコクから一歩出ると見渡す限り水・水・水で、それがえんえんと３００ｋｍ以上も広がっていた。その中をまっすぐ延びる国道、国道は盛土してあるので、あたかも長大な架け橋のように湖の中へ続いている。ところどころの

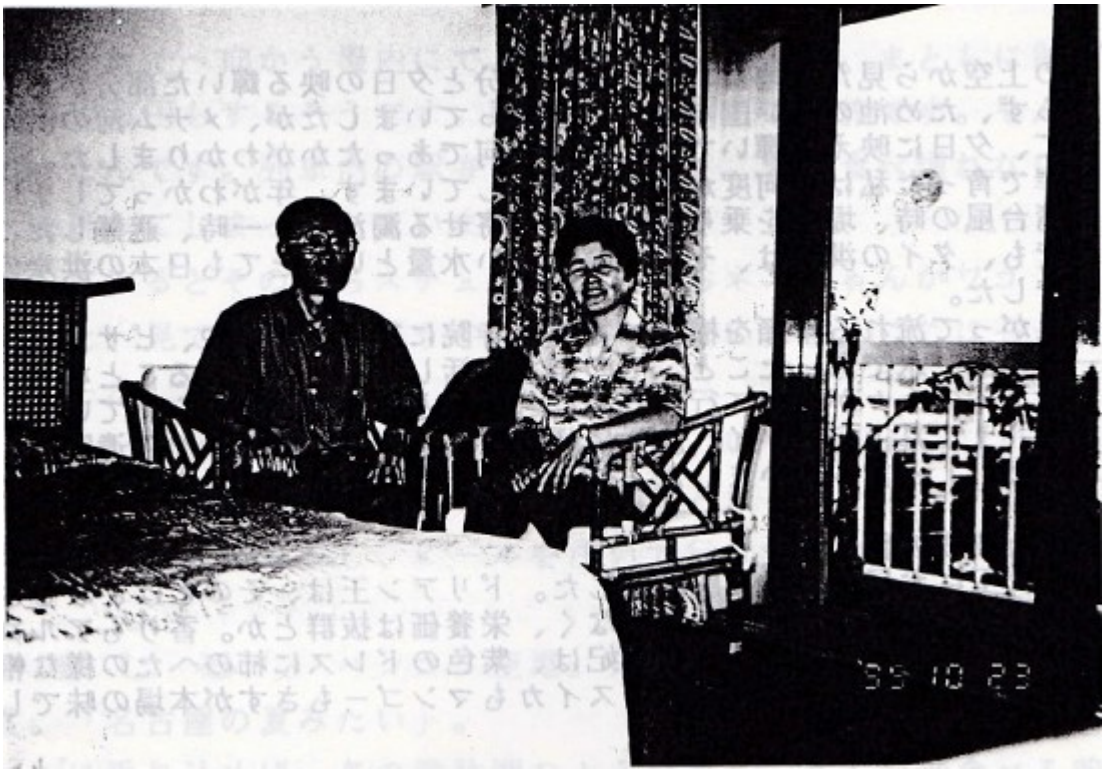
ドライブインやガソリンスタンドの敷地はその橋に寄りそう島のように見える。田園地帯では水は結構きれいだった。高床の家の中から釣りをしている人、鰐が逃げだしているというのに水没した田の中に胸まで入っている人、国道から集落へ続く道が水没して往来に仮桟橋を通っている人、など、水とうまく共存しているようにもみえたが、旅人の無責任な見方であるだろう。バンコクのチャオ・プラヤ川は、さすが河口に近いせいか濁流はものすごく早く、川面が盛り上がっていたが、上流のあれだけの面積を覆う水が流れ出すのには相当の時間がかかることも想像できる。わずかの見聞ではあるが、関東平野より広い面積が２カ月も一面水に浸かったままでいることや、その中で暮らしている人の様子は、日本の洪水の、濁流が押し寄せるというイメージとは全くちがっていた。

５　果物はみなうまかつた・・！

毎日いろいろな果物を食べた。スイカもパイナップルもバナナもうまかった。女王はマンゴスチンで、王様はドリアンだという。念願かなってその両方を味わうことができた。ドリアンはその大きさといい全面硬いとげに覆われていることといい、実に堂々として存在感十分であった。その皮は腐敗しはじめると猛烈に臭うという。そのためホテルへは持込み禁止の由。実際には全く気にならなかった。黄色の上等なチーズケーキのような中身はうまかった。味を表現する言葉にも乏しくて残念。発酵しやすくタンパク質に富むため、酒と一緒に腹へ入れるとひどいめに会うと言われて、その前後数時間は―同禁酒した。(ほんの少しの時間だけ禁酒の人もあり?)。タイのノンタブリは世界一の産地だという。そこへ行ってみたい。食べる事はもちろん、あの実が直接幹になっている(幹生果というのだそうである)のを見てみたい。

６　日食病にとりつかれた・！

もう次の機会が待ち遠しい。大蔵さんの予言のとおり、しっかりとこの病にとりつかれてしまったようだ。しかし、ただコロナの魔力のせいだけではない。準備段階そして出発から帰宅するまですべて配慮し御苦労いただいた大蔵さんと宮沢さん、そして、この毎日を楽しく過ごさせてくださった同行のみなさん、この同好の方々がつくりだした、すばらしい旅の魅力が大きい。ありがとうございました。今回行った方も都合で行かれなかった方も、モンゴルへまた中米へ一緒に行きましょう。



ご夫婦で、参加された昆虫取りの名人塚田さん

***** ***** ***** *****

１９９４年　３月１２日　総会にて

会報１２号より(1995 年 12 月)

太 陽 と 水 と 果 物 と

塚田　千春

○「10 月にタイへ日食を見に行こう!」と珍しく夫が言い出したのはまだ雪の残っている頃だったかと思います。高二の我が家の二男も『親は無事で留守がよい』の年頃になり、家を空けることが苦にならない時期にもなったし、私自身海外旅行は初めてのことなので、一緒ならなんとか行けそうだと安易に決めて、「たまには、一緒に行くのもいいね。」となった次第です。

もともと数字に弱い私は、天体の何万光年という単位を聞いただけで恐れをなし解ろうともしないなまけものですが、山に登って見た星のまたたきや、以前しんじんと冷え込む諏訪の星空の美しさに感動したことを、今ごろ思い出したりします。最近では、8 月のペルセウス座の流星群と今年１０月に河童橋の上でみた星空が印象に残っています。

○本当に、太陽がなくなった!

１０月１６日の最終打ち合わせに参加した時、観測のポイントなど教えていただきましたが、予備知識のない私は、シャドーバンドやピンホールも耳新しい言葉でした。

「自分の目でしっかり見ること」を肝に命じ、観測準備なしの出発でした。

１０月２４日早朝ピサヌルークを出発。見渡す限りの洪水の中を一路ナコンサワンへ。観測地点のドライブイン広場は、前夜の雨であちこちに水たまりができていたが、好天に恵まれ、『きらきら』の品行方正さを裏付けるかのようでした。(約１名は、他国まで行ってトンボや蝶を密猟していましたが、大勢の人がよかったので、影響がでなくて本当によかったです。)

私たちの近くには、日食を見に来た家族連れや、わざわざチェンマイから見に来たという 60 歳の女性もいました。この女性が用意してきた薄い金属片を貸してくれたので、私は少し欠けた青い太陽を見ることができました。あれは、何の金属片だったのでしょう。

大蔵さんからいただいた感光フィルムをのぞいて、刻々と近づく皆既日食の時間を待ちました。小山さんの作られた象の絵のピンホールをとおして、欠けた太陽がいくつもみられ、車に落ちた木洩れ日も不思議な雰囲気を感じさせていました。

あんなに暑かった陽射しがかげり、あたりが薄暗くなって夕暮れのようになる頃は、緊張さえ感じていました。そして、真っ黒な太陽。星も見えている。コロナも。これがダイヤモンドリング。私は、夢の中にいたような気がします。

帰宅してから、「やっぱり実物大の皆既日食を見たんだ。ナコンサワンで見たんだ。すごいものを見てしまった。」と日増しに感動を強くしています。

○大洪水!

バンコクの上空から見た大地は、濃い緑の部分と夕日の映る輝いた部分がありました。

洪水とは知らず、ため池の多い国なんだなと思っていましたが、メナム河の洪水を目の当たりにして、夕日に映えて輝いていた部分の何であったかがわかりました。

千曲川の岸で育った私は、何度か洪水を経験しています。年がわかってしまいそうですが、伊勢湾台風の時、堤防を乗り越えて押し寄せる濁流で、一時、避難したこともありました。でも、タイの洪水は、その規模といい水量といいとても日本の洪水の比ではありませんでした。

あの盛り上がって流れる早瀬を横切って暁の寺院に行ったことや、ピサヌルークまでの平野が一面の水、水であったこと。その中で生活している人がいることなどを思い胸が痛みます。１１月上旬にタイへ旅行に行った友達は、「アユタヤの遺跡は、洪水で見られなかった。」と言っていました。一日も早く水が引けることを祈るのみです。

○おいしかった果物の数々！

果物の王と女王にお目にかかり感激でした。ドリアン王は、そのとげとげしさに似合わず果肉の柔らかさ甘さはたとえようもなく、栄養価は抜群とか。香りもアルコール氏との相性の悪さも個性的。マンゴスチン妃は、紫色のドレスに柿のへたの様な帽子。色白な肌とほのかな甘さがすてきでした。スイカもマンゴーもさすが本場の味でした。

***** ***** ***** *****

２００１年　８月１２日　踊る塚田武男さん ＆ 嶋田夫妻こそこそ

会報５７号より(2013 年５月)

金環日食観望記

塚田　武男

金環日食をどこで見ようかと、五月初めに悪友二人と相談した。三人ともサンデー毎日で暇だけはあるから事前に下見をすることにした。

候補とする場所の条件は、金環になることは当然として、そんなに遠くないこと、東の空が開けていること、前の日から(一杯やりながら)車を止めて車中泊できること、晩飯朝飯を得られること、きれいなトイレのあることなど。そんなことを色々考えて下見は八ヶ岳の周りを主にして、小諸高原美術館、佐久市の道の駅ほっとぱーく浅科、野辺山、富士見町の道の駅信州蔦本宿、原村の八ヶ岳高原を回つてみた。

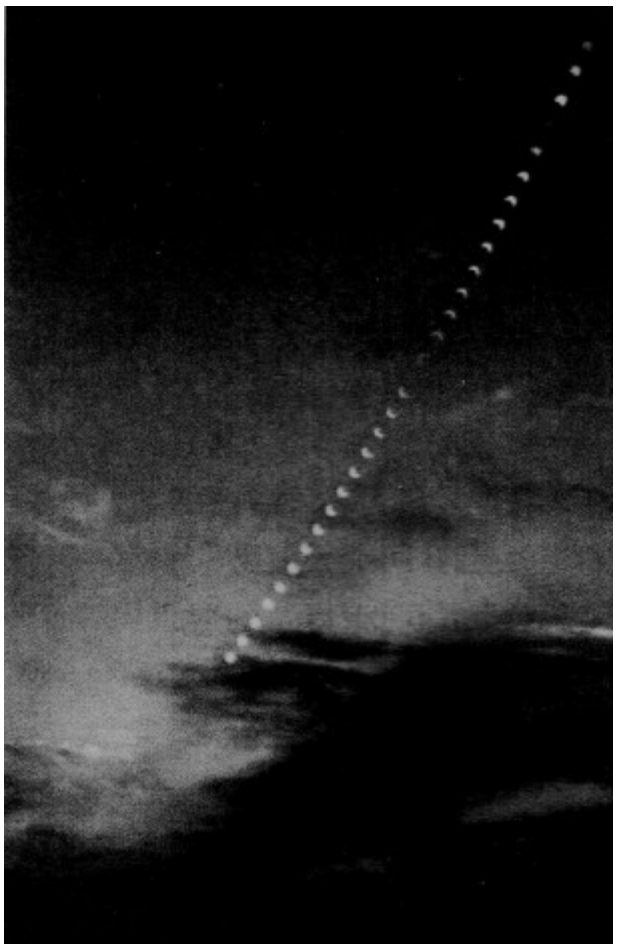
小諸高原美術館は、駐車スペースは十分で、東の方角も開けているが、金環日食の北限界線から十分南に位置しているか確信が持てなかつた。野辺山と原村は適当な駐車場所が見つからず、食事などにありつけることも困難そうだつた。蔦木宿は、食堂などは快適そうだが、肝心の眺望について言うと、ここは谷間に位置しているようで東の空が限られていた。

結局道の駅ほっとぱーく浅科が最適ということになつた。国道１４２号添いに位置するここは、車道の両側に歩道が設置されている。東側の歩道は水田から１ｍほどの高さがあり、目の前に広がる水田を見渡せる。浅間山は北東の方角に見えて、朝日が昇る方角ではないが、日の出の早い時間から太陽が見えそうだ。道の駅と駐車スペースは国道の西側にある。

さて前日、午後も早いうちにほつとばーく浅科へ到着。夕日の残る田んぼや浅間山を眺めながらワンカップをちびりちびり。丁度大相撲の千秋楽の日、友人のカーＴＶで飲みながら観戦。劇的な旭天鵬の優勝を熱く応援した。琴欧州との不戦勝で登場した栃皇山が登場すると我ら３人はカップがぶ飲みで手に汗を握った。そんな不戦勝で出てきた者が優勝なんて許せない。旭天鵬が優勝を決めると我が事のように更に杯を重ねた。そしてレストランへ移ってそれぞれ好きなもので夕食。地元の人々も来ていて結構流行つている道の駅だ。そのうちに金環食を目当てらしい車もちらほらとやつてきた。後は明日の好天を願つて寝るばかり。

さて当日、空の白む頃起き出してみると、ところどころに雲が浮かんでいるものの、浅間山もすつきり見えているし、東の空も晴れていて良好な天候であつた。国道の東側の田の土手に三脚を据えて日の昇らないうちに先ずは連続写真用の景色と空を一コマ写し、しつかり固定する。マミヤＲＢ６７に６５ｍｍレンズでブローニフィルム、このコマの上にＮＤフィルターを通して太陽を５分ごとに写していくのである。空の赤みがかかつた様子から太陽が昇る方角を見当を付けてこのコマを撮ったのであるが、実際に太陽が出てみると予定した位置よりも右に寄つていて、これでは日食の終わり頃にはフィルムの画面から外れてしまうかもしれないと心配する程である。されどもう日が出ているのでこのコマを撮り直すわけにも行かない。太陽が右へ行き過ぎないよう、神様お願いだ。ミラーアップ

で多重露光を続けるので途中では確認できないので只信じるのみ。（日食が終了した後、ＮＤフィルターを外して恐る恐るピントグラスを覗いたところ、全般的に右半分に偏つているもののどうにか終了時点まで太陽はファインダーの中にいてくれたようであつた。後日現像したところ、写真のように真ん中から右上にかけて日食の進行が写つていた。）

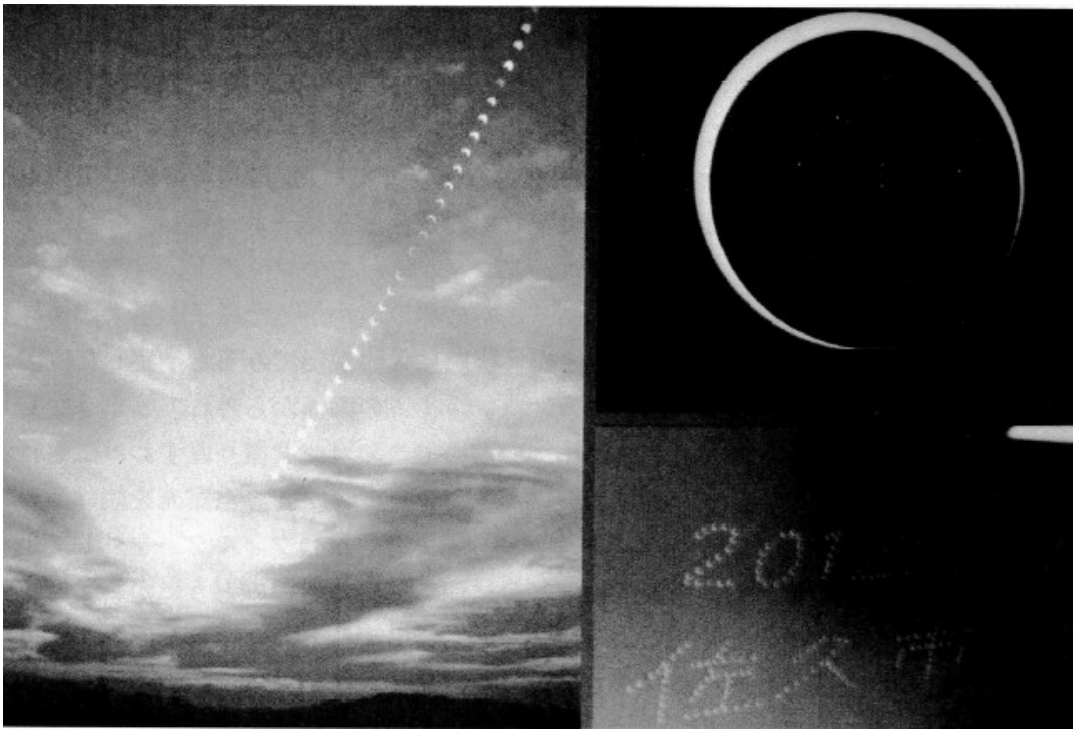


今回は、多重露出の連続写真のほか、望遠レンズによる金環太陽の撮影と、針穴の投影による太陽の影を写すことにしていた。そんなこんなをセットしていると、田の水を見に来たご夫婦に覗かれたり、わざわざ道の駅に車を置いて見に来たりする人に針穴を説明したりしている間に、いよいよその時が近づいてきた。田の面に映る光も薄くなり、気のせいか空気も冷えて感じる。駐車場に居合わせた人皆が息をのんで見上げた。

あつという間に金環は終わってしまった。

やれやれとほつとした感じと、満足感とでしばし空白を感じる。その後は、完全に終了するまで５分ごとの多重露出を続けた。９時過ぎに撮影を終了して片付けをし、コーヒーで乾杯。朝飯も食わずにがんばったが、さして空腹も感じないので上田へ戻つてそばを食うことにした。

この時撮影した写真でつくった組写真が、写真県展に入選となり、又一つ嬉しい記念となった。自画自賛ですが、良いでしょう。見てください。



会報３１号より(2001 年２月)

オーロラを追ってフィンランドへ

塚田　武男

１　出た！　見えた！　・・・

大きなカーテン、長くたなびく帯、吹き上げるように立ち登る柱・・・目の前一面に広がるオーロラに声もなく立ちつくした。青白くまた緑がかった色、たえず動き続けて、巾が変わり、色の濃さが変化し、地平から吹き出してきたかと見るとぐんぐん広がってたなびいていく。落ち着いて考えて見ると、決して風の吹き渡るような速い動きではないのだが、見ほれているせいか一時も止まらない動きが速く感じられる。

オーロラを通して星が輝いて見えている。北斗の尻尾から、アークトゥルス、ヴェガ、白鳥がオーロラの中で光っている。白鳥はくちばしを下にして、オーロラをまとつて火の鳥となって地平線につっこんで行こうとしている。

それにしてもこの大きな動きのある現象が音のまったくない中で起こっていることには、不思議な感じがするものだ。上空２００Ｋｍで生じている現象だとのことであるから、音がなくて当然だとはいっても、しんとした中で現れ動くこの様に一層神秘的なものを感じる。

２　それは最終日のことだった、ツキは残っていた・・・

オーロラを十分に見たこの日は、フィンランド滞在の最終日だつた。ヘルシンキでは見えなくて当然として、ほぼ北極圏のロバニエミではもやがかった空のためうすぼんやりしたものしか見えず、北極圏を越えてさらに北へ２００Ｋｍラップランド奥地のサーリセルカでの 3 日間は毎日空模様が悪く、きがきではなかった。ホテルからも近くの丘の上からでもその辺どこからでも見えるという場所なのに。その日も午前中はどうにか晴れていたが昼前からひどい吹雪模様、とがった雪片が乱れ舞う状態であきらめかけていた。その時、晴れている場所を追いかけてバスを出すというツアーの募集があつた。夜９時発、４時間ほど動き回って１時帰着という。３０Ｋｍくらい動き回ってそれほど天気が変わるものかとも思ったが、ここにいても同じことであるし夜のラップランドを走るのも面白いだろうと早速便乗することにした。５時頃吹雪がやんできたと思ったらみるみる星空がひろがって真っ暗な上空に天の川もすっきり見えてきて期待が高まった。バスが出発して 10 分も走らないうちに行く手に大きくオーロラが出現、すぐバスを止め降りる。体が冷えてくるまで眺めてから乗り込み走る。

イバロ近くでまた大きなのが出現、降りて眺める。さらに北のイナリ湖のほとりまで行くがここは曇っていてあの降るような星も見えなくならていた。すぐ引き返してサーリセルカの近くのカウニの丘へ登ると、最大級のオーロラがでていた。竜巻のような動きをしてただただ見事というよりほかなく見とれた。この丘の上は強風が吹き荒れていて地吹雪となり腰から下には雪片がびしびしとあたって、三脚も吹き飛ばされる始末、北極風の一端を経験した。ホテルに戻るとさらに別のオーロラがでていて、寒さががまんできなくな

るまで眺めた。この分ではホテルにいても十分見ることができたようであった。
　そんなわけで一度は諦めかけた天候が、現地を離れるぎりぎり最後の夜になって回復したことは幸せなことであった。いささかのツキは残っていたということか。

３　ラップランドは雪原と森がどこまでも続く・・・
　北極圏入口のロバニエミ(正確に言えばさらに 8Km 北のサンタ村が北緯 66 度 33 分 07 秒の北極圏入口である)から 230Km 北のイバロまでは緩い起伏があるのみの坦々とした地形が続いている。時々暖炉の煙突をつけた家が現われるが、いくら行っても景色は変わらないように見える。クリスマスツリーをもう少しスマートにした樹形の針葉樹林が続き、時々平らな雪原が現われるがそれは湖だという。樹種はアカマツとトウヒで、これにシラカバの 3 種でほとんどを占めているという。アカマツは、葉が短くて樹の姿もトウヒのような形になっているのは積雪のせいだろうか。林の中は適当に間隔をおいて生えていて明るい感じがする。どの樹も下枝までちゃんとついているのは、このまばらの具合いによるのだろうか。積雪は 1m からもつ少しくらいかと思うが、乾燥していて踏んでもあまり沈まずきゅっきゅっと鳴り、風が吹くと雪面を吹き飛んで行く。夏はこの地表にベリー類が実って冬中のジャムなどの材料になるそうだ。林の樹のまばらの具合いが、樹の上から下枝までの日当りを確保して成長を進め、樹下に低木の豊かな結実をもたらすのであろうか。(私の勝手な想像であるので違っているかもしれないので悪しからず。)
　森と湖の続く大地は、ヘルシンキからロバニエミの間 700Km もほとんど同じように見えた。四国を除いた日本とほぼ同じ面積に 500 万の人口というフィンランドでは、人も木も間隔をおいてゆったりと住んでいるのだろうか。

４　当り前のことながら昼は短い・・・
　サーリセルカでは 1 週間前に初めて太陽がでたという。10 時前頃から朝焼けが始まり、11 時頃南南東から赤い太陽が顔を出し、そのまま横へ僅か動いて 1 時頃には南南西に沈んで行く。朝焼けが夕焼けまで続いて行く。地球のてっぺんに近いところでは太陽ははるか南にいて、その光を地球の縁すれすれに低く送り込んでいるのかなと思う。
　午後 3 時過ぎには南に金星がひかりはじめて、朝 8 時にはまだ星がでている。日本で健康的な暮しは、明るくなったら起き、暗くなったら寝ることだとかいうが、これによればラップランドでは 20 時間位寝ていなければならなくなる。その分夏は寝る間もなくなるということか。

５　北天が目新しい・・・
　生極星が頭上高く光っていて、見上げていると首が痛くなる。その下、長野で北極星くいらいの高さのところ、左にカシオペア、右に北斗七星がかかっている。そのまた下、見やすい高さに左からカペラ、ベルセウス、アンドロメダ、白鳥、ヴェガ、さらにアルクトゥルスまで並んで順に地平線上を西から東へと動いて行く。いつもは頭上にかざして見る星座表を下に置いて、表の左側に「東」と書いてあるのを「西」と書き換えて眺めたそのままが目の前に展開している。いつもは北の地平線の下に隠れてしまう空はこんな風にな

つていたのかと今更に天と地球の丸さを実感する。なんとも新鮮な驚きを覚える星空だ。
　北から広がってきたオーロラの中に、白鳥は倒立し、ヴェガは白い輝きを増し、うしかいはアルクトゥルスを下にしてそのネクタイの剣先を突き上げている・・・。オーロラが消えたあと気が付けば、カシオペアは北極星の下方に水平にWの字になっている・・・。寒さを忘れてみとれた北の空であった。
　ゼウスの奥さんの怒りで海に入れなくなり、1 日中休みなく廻り続けなければならなくなったという大熊・小熊だけではなく、琴も冠も双子も同じように廻り続けなければならないとは、どんな神話になっているのだろうか。

*****　*****　*****　*****

２００１年　８月１２日　感無量です！！

会報５２号より(2008 年 12 月)

こんなこともある
不運な新彊ウイグル自治区の皆既日食

塚田　武男

皆既５分前、浮かんでいた一つの雲が太陽のまん前に来た。皆既開始、第二接触は確認できない、２分０１秒間の皆既時間の終了寸前なんとか第３接触を見ることができた。その数分後、雲は離れて部分日食終了まで太陽はその全容をしっかりと見せていた。

なんという事か、部分食開始から部分食終了までの１時間５６分０８秒のうち、皆既の２分０１秒を挟むわずか７分程の間のみ、太陽が雲に隠されていたのでした。

皆既中にかかっていた雲の様子は、写真で見てください。左上に金星が写つているのですが見えるでしょうか。この一部始終は、天文ガイド１０月号の２１頁に「不運の皆既日食」という題で掲載されている写真がよく表わしています。

この観測地は、宿泊地の巴里坤(パリクン又はBALIUN)からバスで３時間半ほどの距離でした。はじめの１時間ほどは平原に草原が広がり、村のまわりや道沿いにはポプラなどの樹木が見られたが、その先は石ころと砂だけの平地と低い丘がえんえんと続いていました。往けども往けども続く砂礫の中を進むと、周りの 360 度に逃げ水が見えていました。もうすぐ前方の湖水のように見える水辺に達するかと思って進んでいくと、その水辺も先へ先へと遠ざかって行くのでした。そんな先のモンゴルとの国境に近い北緯４４度３４分、東経９３度２５分の地に観測地がありました。逃げ水に地平線の彼方を囲まれ、所々に数ｍの砂山や岩があり、その付近にごく希に、小さなからからになった刺とげの草か潅木が生えている、生えていると言うより転がっているという感じでした。西北の遠くに低い山並が見えました。日光は強烈で、気温は４４度とのことで風は熱いものでしたが、湿度は１０％で、汗はかきません。そんな中で部分食開始から約１時間の耐熱経験、いざ皆既と言うときに雲がやってきたのでした。帰路に見た地平線に沈む夕陽は見事でした。

今回の旅程は、成田発、杭州・西安経由ウルムチ、トルファン、巴里坤、敦煌、西安の１０日間でした。天山山脈やシルクロードの一部をたどり、古城蹟・仏洞を尋ねたり兵馬俑を見たりして、世界の広さと歴史の一端に触れた思いがしています。断片的ですがそのいくつかを書かせていただきます。

写真上　第３接触のダイアモンドリング
写真下　皆既中の空の様子。左上に金星がみえる。

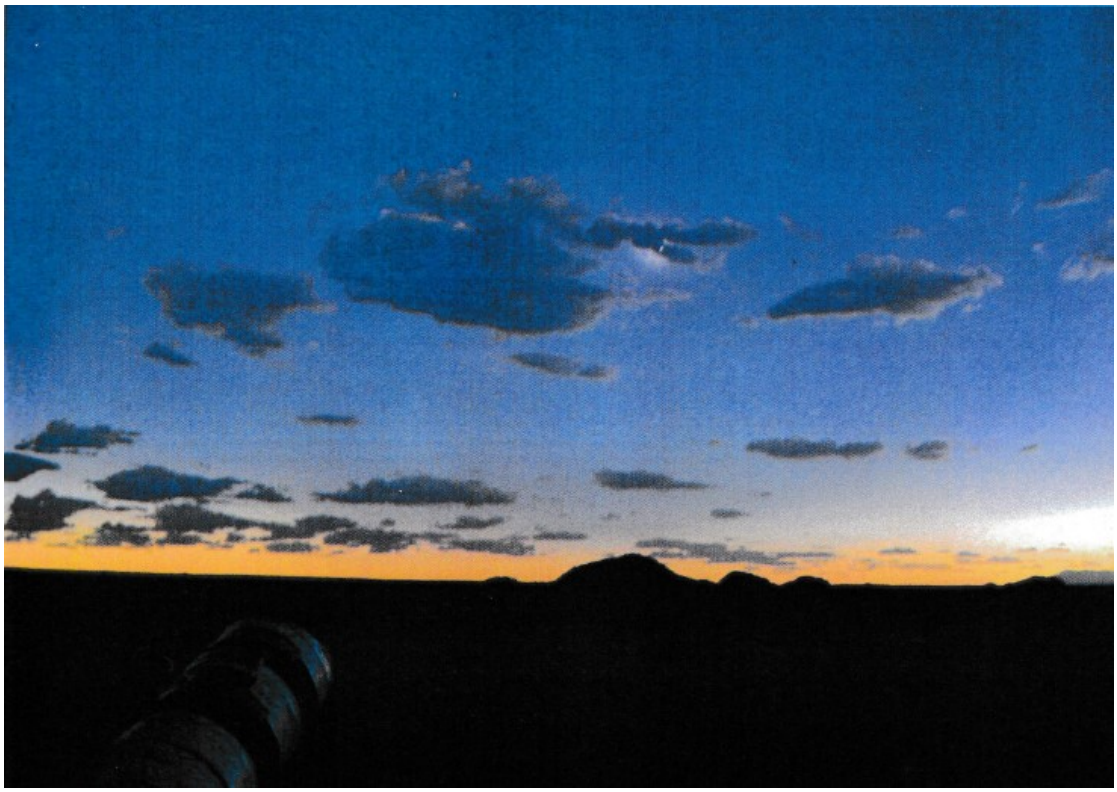


写真　荒野の中をまっすぐに通る高速道

○「ゴビ」、砂漠、砂礫の実像

このゴビという言葉は、固有名詞の「ゴビ砂漠」として一般的に知られています。モンゴルから中国北部にかけてひろがる大砂漠の名称です。

モンゴル語では砂礫を含む草原といったような意味の語だそうです。砂の砂漠に対して、岩石や砂礫から成る地域、礫砂漠とでもいう所をゴビと言えば良いようです。砂の砂漠よりも比較的植物がみられるといいます。トルファンからハミを経て、敦煌にいたる道を延べ２０時間以上バスで移動しましたが、ずっとそんなゴビと言っていいような砂礫の中でした。時に岩山の天山に雨があると一時に水が流れるといいます。ワジと言うのでしょうか涸れ川が見られます。そんなところには枯れたように見える植物がまばらにあったりします。ちょうど日本の「ほうきぐさ」の枝をこわくしたような感じで、タマリスクというのはああいうものかなと思ったりしました。

そんな荒れ地・砂礫地を２００ｋｍも行くと次のオアシス都市か食堂のある休憩地があると言った具合です。道路は片側１車線の舗装道路がまっすぐ続いていて、トラックは頻繁に行き交つていました。数１０ｋｍから数１００ｋｍの間にゲートがあって有料道路になっていました。西安から敦煌、トルファンを経てウルムチやカシュガルへつながる大動脈で、ほぼ古えの天山南路の位置にあるようです。

「砂漠」という語は、砂丘が続いていて、一夜風が吹き荒れるとその砂丘が姿を変えてしまう、そんな細かい砂の広がりの場所であって、雨が極端に少ないので植物がほとんど育たない土地と言えばいいでしょうか。現地のガイドさんは、こんな砂礫の荒野は砂漠とは言わない、タクラマカン砂漠が砂ばかりの砂漠だと言っていました。しかしあの砂礫の

荒野はどうしても砂漠だと思えてしまうのです。砂漠というものの中に、砂砂漠、礫砂漠などとそれぞれ状況の異なるものがあって、ひとくくりにはできない、ひとつのイメージでは包みきれないものだと思らたところです。

○天山山脈、トルファンなどオアシス都市

山脈と聞くとつい一列の山波を想像しますが、天山山脈は、沢山の山脈があるいは平行にあるいは交錯しあって東西２５００ｋｍ、南北４００ｋｍに亘って地を占めているとのことです。海抜４０００ｍから５０００ｍの山岳が数多くあり、おおよそ３６００ｍ以上の岳の多くは氷河を持っています。今回も山麓に近ずくと見上げる岩山の谷筋に氷河がみられました。緯度が高いので雪線が低いところにあるようです。

往時東西交易の幹線は、この山脈がその北側と南側の所々に供給する水に依存するオアシスを繋いで路ができ、それぞれ天山北路、天山南路となっていたといいます。今の高速道や幹線もほぼこれに沿っています。ゴビの砂礫の荒野の中に数１００ｋｍ離れて存在するオアシス都市、ウルムチ・トルファン・ハミなどは皆この天山山脈の氷河の恩恵で存続しているのです。人口１００万以上を有するウルムチや６０万というトルファンも例外ではありません。大抵の川は平素干上がっていて使える水を供給してくれるものは数少ないのです。

トルファンでは天山の麓に水脈を探して井戸を堀って、途中の蒸発を防いでえんえんと数１０ｋｍの暗渠で水を引いているそうです。そのカレーズと呼ばれる地下水路は、１５００本以上あり、その延長は６０００ｋｍにも達するといいます。地下の水路の水はまず飲料などの生活用水に使われ、次は地表にでて畑を潤し、余る時季にはダムに貯められそこから先の流れる川はありません。そんなトルファンが農作物を自給してなお新鮮な野菜や干葡萄を他へ供給しているときくとただ驚くばかりです。

オアシス都市についてガイドが聞かせてくれたことのひとつに、地球温暖化のことがあります。住民たちは、温暖化によって天山の氷河が減っていくのではないかと心配しているというのです。氷河が水を供給しなくなればこれらのオアシス都市は、いにしえの高昌故城遺跡やアスタナ古墳群、あるいは楼蘭遺跡のように滅びるほかないという切実な問題だというのです。

○火焔山、ペゼクリク千仏洞

ウルムチから１８０ｋｍ、天山の北から南へと山脈の切れ目のような所を横切ってトルファンへ出る高速道ができています。高速道ができる前は４時間以上かかったというが、高速道料金（普通車で４０元）を払えば快適な３車線或は２車線の道路で３時間内に達することができるようになったそうです。この路は古来、北方遊牧民族の侵入路にもなっていて、トルファン地区には時代時代によって遊牧民族が住んだり、ウイグル族や漢民族、また他の民族が住んだりした歴史があります。現在はウイグル族が多数の多民族都市となっています。トルファンという語はトルコ語で暑い場所と言う意味だそうです。年平均３回の雨で１６ｍｍの降水量、海抜標高は平均３２ｍ、最低はマイナス１５４ｍで、周囲のゴビの砂礫が強い日射しで焼けるのを反映して気温が４０度を越えることは日常的であり、

とにかく炎暑の地です。しかし、カレーズによる水の補給により、綿の品質は極上で、葡萄の種類は６００以上あり、瓜、杏、麦、ひまわりなどが豊かだといいます。葡萄は糖分が多いので３ｋｇの葡萄がｌｋｇの干し葡萄になる、それも日干し煉瓦を互い違いに組み上げた壁(半分は穴)の干し場に入れておくだけで、３日で干し葡萄が出来上がるとのことです。ハミ瓜という名で古来シルクロードのキヤラバンの水分補給に欠かせなかったという瓜も今はトルファンの方が多く生産しているそうです。

この街の郊外に火焔山があります。西遊記の孫吾空の活躍する伝説で有名なこの山は赤い砂岩でできていて、気温が４７度から７０度にも達する事があるという中国一熱いところだそうです。その乾燥状況のためその麓にあるペゼクリク千仏洞やアスタナ古墳群の保存状況は大変好いので研究が進むということでした。仏教壁画の色彩はよく残り、古墳から出土する人体は乾燥し文書文物は食品の類まで完全な形で残つてぃるとの事です。

〇敦煌

有名な莫高窟にはただ驚くばかりでした。洞窟内の壁が仏画で埋め尽くされているので、別名千仏洞とも呼ばれるそうです。またどの洞窟にも描かれている飛天は、それぞれ優雅でユニークで楽しいもので、飛天だけの絵はがきも何種類も売られていました。この莫高窟は鳴砂山の裾にある小さなオアシスの中の１５００m以上の長さの断崖に掘られています。こんな小さなオアシスに寄り添って、４世紀から１４世紀まで千年もの間、石窟を造り続けた人々はどのように暮し、どんな信仰をいだいていたのだろうかと考えてしまいました。

鳴砂山の反対側には月牙泉という池があり、周りを砂漠で囲まれているのに、何千年も涸れたことが無いといいます。その近くまでラクダ(有料)で行くことができます。(もちろん歩いてもいいし、カート(有料)でも行けます)そのラクダは近くの農家の人が飼っていて、稼ぐためにここへ連れてきているものだそうです。おおよそ２００頭以上が集まっていて、切符(乗駱駝券?)を買うときちんと順番にラクダが引き出されてきてそれに跨り、４頭を数珠つなぎにして農家のおばさんが歩いて曳いて行くというものです。二瘤の間は結構治まりよく乗れ、瘤は厚さが１５ｃm、長さは５０ｃm位でごわごわした毛が生えていました。乗り降りの時、前足から折ってすわり、後ろ足から立つので、いずれの時も自分の体を後ろへそらせると安全だとの事です。貴重な現金収入なので農家の人はラクダを非常に大切にしているそうでした。登り口では靴カバーの貸付け屋が呼び込んでいましたが、たしかにこの山は細かい砂の山で、歩き難く、空中にはこまかい砂がただよっていてストロボには一面反射するほどです。またラクダやカートの終点からの砂山は、急傾斜のため普通では登りにくいので砂を階段状にしたところの通行料をとる(登り約３０分)商売もありました。いろいろと工夫をしている観光地です。

敦煌へ行ったらぜひ行ってみたいと思っていた場所の一つが陽関の跡です。その昔「西の方陽関を出づれば故人なからん」と漢詩に詠まれた場所、当時の長安の都から西の彼方の唐の勢力のおよぶ最遠最端の地の陽関の守りに送り出される知人を、その無事を念じて詠んだと私は勝手に考えて思いをはせていたのです。

敦違の街から西へ６０ｋm、ゴビの砂礫の中を１時間、その地は砂山の上に大きな四角

い岩が関跡として残っているだけでした。付近には観光のために建てられた回廊が彩り鮮やかに連なり、馬に乗せてひとつ先の丘の上まで往復することを勧める客引きが盛んに声を掛けていました。丘の上は砂が熱くて風も熱風でしたが、西の方角は遥か地平線のかなたまでタクラマカン砂漠が広がっていました。西のはずれを実感しました。そういえば、敦煌は甘粛省に属し、中国の省としては最西でありこの先は新疆ウイグル自治区に属する地域であり、往時も今もなにか風が違うのか、と思いました。

〇西安

ここには中国の１２の王朝が都を置き、最後の皇帝は清朝皇帝であの満州国の君主にされた溥儀だったそうです。それはそんなに遠い昔の事ではありませんので、生々しい歴史です。現在人口は８４０万、道路の混雑具合は生半可ではありません。地下鉄工事も行われていて、特に城壁に囲まれた地域は猛烈です。信号など機能せず少しの隙間にもつっこんできて割り込みする車の洪水、自転車、バイク、歩行者みな自己責任で行動しているのでしょうが、はらはらのしどおしです。

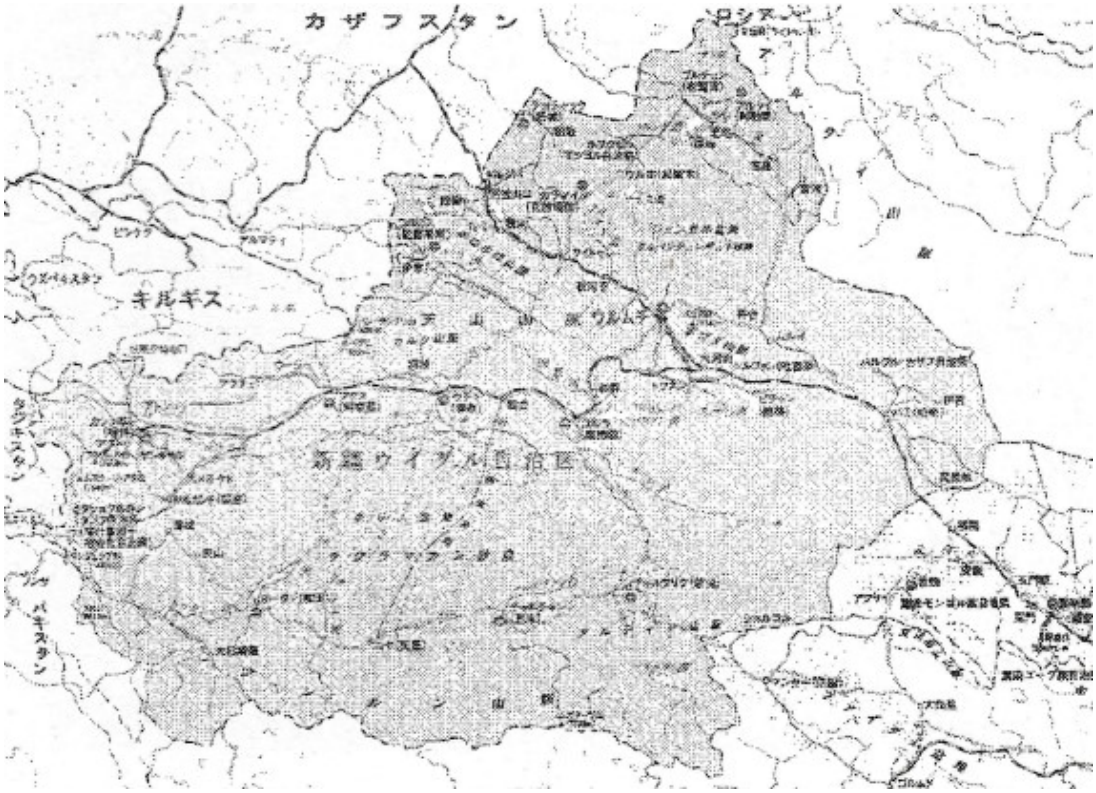
往時の長安、平安京はこれに倣って街路も敷かれたという長安の、中心部を囲む城壁は、巾が広く自動車も走れるし、城壁の上一周のマラソンもあるとのことです。城壁には東西南北のほかいくつかの門がありますが、私が特に印象深かったのは西の門です。今の城門そのものは明の時代に造られたもので、中は土をかためて表面を煉瓦で覆われています。西の門は、シルクロードの起点であり終点ですので、往時のキャラバンの到着やら、あの「西の方陽関をいずれば・・・」と名残はつきず出発して行った兵士達を思うと、また西の門が印象深く眺め、周辺を歩き回りました。ここから西に向かうキャラバンは敦煌まで急いでも２カ月かかったそうですが、今回わずか２時間たらずの飛行でした。

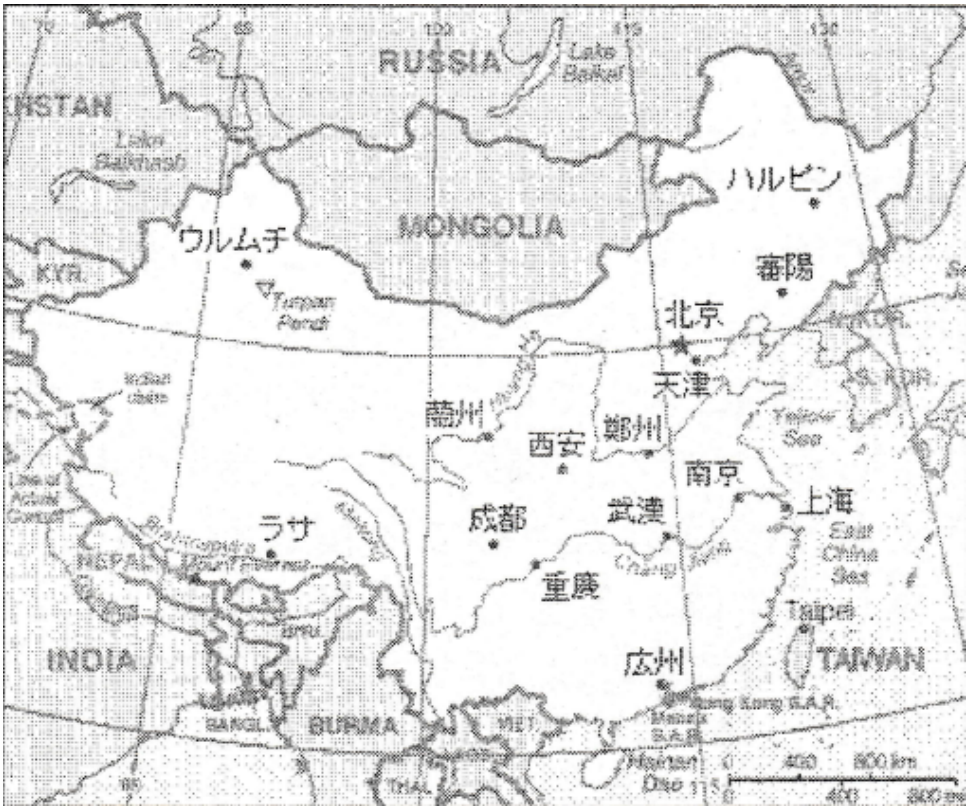
秦始皇帝稜と兵馬俑坑は、その規模の大きさは圧倒的です。兵馬俑坑に並ぶ俑の群像にはただただ驚くばかりです。その１号坑は、写真撮影は全く自由です。沢山の俑はその発掘時には色がついていたが、保存に失敗して皆色彩が失せてしまったので、ストロボでもフラッシュでも使って撮影してもかまわないのだということでした。（高松塚古境のことをちらっと思いだしました）さらにどのくらい埋まっているのか見当もつかないとのことで、３号坑の一部発掘は保存方法が開発されるまで中断されていて、照明も薄暗くされていました。

ここで面白い話を聞きました。この兵馬俑を最初に発見したのはこの地で耕作をしていた農夫でした。耕作中に最初の一つが鍬に当たりました。それを専門家の学者に見てもらったことからこの世紀の大遺跡が見つかったのだそうです。それから大々的に発掘がおこなわれました。この地で農業を営んでいた農家の人達は、農地から離れ、この兵馬俑坑関係の清掃やら警備やらの仕事につくことになりました。村人は皆、それまでの農作業にくらべてずっと楽な仕事で暮らせるようになり大喜びだそうです。その最初に堀当てた農夫は村の人達から尊敬され大事にされる存在になりました。悠々暮らしているこの人は気が向けば、施設内の記念品や関係書籍の販売所へ出てきて、兵馬俑坑の出版物にサインをするということで、ちょうど出ておいでになったので本を買ってサインしてもらいました。なにか模様のようなサインで、知人の中国人に見てもらいましたが、全然読めないと言わ

れました。
　他にも沢山珍しいことを見聞した旅でした。

　(事務局が編集しました)以下参考





***** ***** ***** *****

写真左　１９９４年　３月１２日
総会でのひとコマ

２００１年　６月１４日
新観測所にて　写真右

編 集 後 記

★　きらきら会報６０号の発行が４月下旬に発行できる見込みとなりました。
皆様のご協力を得て漸くたどり着くことができました大変ありがとうございました。
2015 年の宮嵜勉さんに続き、昨年は塚田武男さんと２年続けて発足当時からの会員の追悼特集となってしまいました。私たちだけが残されてしまいほんとうに残念なことです。
ここに、ささやかですが追悼特集を作成し、在りし日の想いを心にとどめることにいたします。

★　２０１７年これからのおもな天文現象

【　７月２５日(火)　水星の食】　出現：19 時 48 分 58．0 秒　(潜入は見られず)
【　８月　８日(火)　部分月食】　部分食始め：２時 22．3 分　高度：　26°
部分食最大：３時 20．5 分　高度：　18°
食分：0．251
部分食終り：４時 18．8 分　高度：　8°
【　８月１３日(日)　ペルセウス座流星群が極大】　午前４時に極大予測
【１０月　６日(金)　金星と火星が明け方に大接近】
【１０月２１日(土)　オリオン座流星群が極大】　20 時に極大予測
【１１月１３日(月)　金星と木星が明け方に大接近】

★　本会のブログをみんなで見よう！！
観望会や定例会など状況報告が次のブログアドレスで公開しています。参加できなかった方も次回の参考に立ち寄ってください。
ブログアドレスは「http://skyquest.cocolog-nifty.com/blog/」です。

きらきら幹事）岩田重一

会報きらきら　　第６０号

発行日　２０１７年　４月２０日
発　行　長野市立博物館友の会
しなの星空散歩会きらきら
会　長　高 野　勝 人
事務局　長野市立博物館友の会内
〒381-2212　長野市小島田町
１４１４
TEL 026-284-9011